



平成21年9月28日

# 卓話 『いけること いかすこと』

華道家元池坊 次期家元

池坊 由紀 様

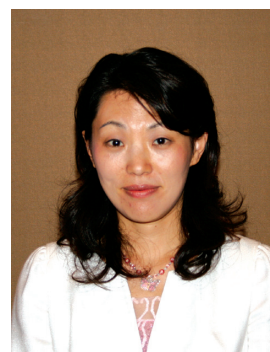


生け花はほとんどの方がご覧になったことがおありだと思いますけれども、どのような精神に基づいているかということあまり知られていないように思います。今日はそういったお話をしたいと思います。

生け花はいくつかの約束事、型を持っています。一種の様式美であるとも言えます。生けることについて定義づけたのが1500年代に活躍した池坊専応です。それ以前の生け花は美しい花を持って来て競い合う、高価な器を比べあつ

て誰が力が強いかを比較するといった側面がございました。専応はそういう世俗的な価値観を離れて、植物の姿、個性を見極めて最大限に生かすこと、そして花を生かすことで自分自身も心を高めることが生け花であると定義しました。私どもはその心を今でも生け花の心として伝えております。

生け花の約束事の一つとして陰陽思想が挙げられます。この世のものは陰と陽がひとつに調和してなっているという考え方です。生け花の空間分割を見ていただくと、すべて均等に分割するというはしていません。空間の大きい



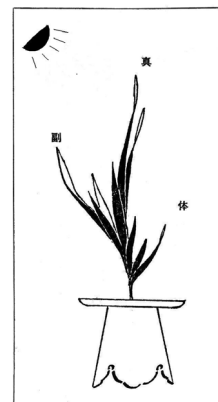
専応口伝



専好立花図



陰陽、生花正風体





所、小さい所、使っている花材も大きい花もあれば小さな花もあるというふうに、それぞれ相反するものを持ってきて、そこで絶妙なバランスをだす。お互いがお互いを引き立て合っているところに調和があり美があるという考えです。

また立花という形が大自然の縮図を表わしていて、足元の部分が命が始まろうとしている源であるという考えから、必ず足元のところは1本にぐっと締まってないといけないんですね。また生け花では通常花のない緑のもの、プラス花のあるものを加えて一つの作品とします。花のない所に花を添えることで陰陽が完結するという考え方です。また木のものとは草のものを生けるときは必ず木のは後ろに挿し、草のものは前に挿します。木は過去、遠い景色を表し、草はワンシーズンで枯れてしまうものですから今現在のこと、また近い景色を象徴しているという考えです。また生ける草木の総本数は奇数

でなくてはなりません。偶数と比べて奇数は1つ欠けている。それは可能性を秘めているという考えです。植物がぐんぐん伸びていく、そういう命のあり様に日本人が期待をかける思いが込められています。

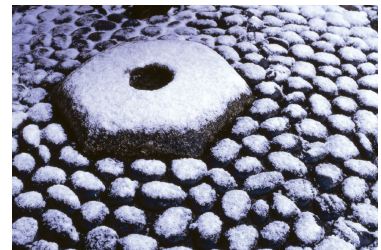
生け花は床の間に飾られる花として、芸術的にも美術的にも進展してきました。掛け軸との関係性、香炉やロウソクとの関係、それからどちらから光が入ってくるかということを重視しました。そういう先人が残した美意識、思想に加えて、現代を生きる私たちが自分自身の感性でまた一つの作品を作り上げることができる。そういう所に面白さ、魅力があると思います。生け花が絶えることなく500年以上続いてきたのは、芸術性の高さプラスそういう精神の独自性があったからではないかと思います。ご静聴ありがとうございました。



立花新風体



六角堂



へそ石



写真左より、平松さん、松木さん、三田さん、山中会長

## 10月お誕生月の会員

- ★ 中島 信二さん (例会は欠席)
- ★ 平松 和也さん
- ★ 三田 大介さん
- ★ 松木 隆央さん
- ★ 門田 真乍子さん (例会は欠席)

